

# 言語専門職「リングスト」の提案

西野 竜太郎  
グローバルゼーションデザイン研究所  
nishino@globalization.co.jp

山田 優  
関西大学  
yamada@apple-eye.com

## 1 はじめに

本稿は、今後の産業翻訳を担う人材育成とその研究の必要性を提案する論考（ポジションペーパー）である。翻訳業界における翻訳等の様々な多言語関連タスクを担う人を「リングスト」と呼び、その新たな職種を提案する。本稿では、その職務範囲とスキル、またその教育方法の確立のための研究について論じる。

### 1.1 背景

翻訳サービスを提供する産業翻訳において機械翻訳の活用が進んでいる。しかし機械翻訳の出力はそのままでは不十分であるため、商品としての要求を満たすレベルまで高めるには人手による補助が不可欠である。その補助を行う人がポストエディターあるいは後編集者である。この考え方は1966年のALPAC報告書[1]にもあるが、1995年に刊行された長尾真氏らの書『コンピュータで翻訳する』でも「機械翻訳システムの生産性を上げるには、後編集を専門に行なう後編集者を養成すべき」[2]とある。ただし、翻訳者が必ずしも後編集に適しているとは限らない[2]としてはいるものの、やはり一般的には翻訳者がポストエディターになることが期待されてきた。

しかし現状の課題は、ポストエディットの仕事に既存の翻訳者が消極的[3]という点である。大きな理由の一つに翻訳者の職務意識がある。つまり、ポストエディットと翻訳は別であり、翻訳者が本来する「翻訳」という職務に入らないと考えられている。「翻訳者とは翻訳をし、また翻訳をするのが翻訳者」と、職名（＝翻訳者）とスキル（＝翻訳）とが強固に結びつき、相互に連想される状態になっているのだ。他方で、機械翻訳を扱う仕事はポストエディットに限定されず、付随する作業や判断が求められる。そのため、従来の職名とスキルとが密接に絡みあった「翻訳者」や矮小化された意味での「ポ

ストエディター」という職種では、今の言語産業の実情に対応できない。そこで、「翻訳者のような翻訳スキルを持ち合わせる専門職」を確立できれば、新たな課題を解決する糸口となり、言語産業を活性化する一方策になると考える。

### 1.2 「リングスト」の提案

前述の通り、従来からポストエディターという専門職は提唱されてきたが、その名称は今後期待される仕事の幅を狭めてしまう可能性がある。たとえば機械翻訳システムに学習させる対訳コーパス構築には、翻訳スキルも求められる。また適切に仕事を行うための機械翻訳品質評価や機械翻訳エンジンの選択等も必要となる。

さらに、機械翻訳が直接関係しない業務にも翻訳スキルが求められる場面はある。用語集作成や翻訳メモリ管理などだ。大きく翻訳品質を左右する重要な仕事であり、翻訳スキルが求められるにも関わらず、これらは「翻訳の周辺作業」のように見做されてきた。しかしポストエディターという言葉と職種にはこれらが含まれていない。

翻訳業界からも同様の意見が出ている。ポストエディットや機械翻訳エンジンの調整といった「翻訳とは呼ばないけれど、翻訳者の資質を必要とする仕事」[4]をリングストと呼んで職能を捉え直すのもよいという意見もある。そこで、翻訳スキルを持ち合わせながらも、ポストエディットに限定されない多言語関連タスクを広く担える専門職として「リングスト」という名称の利用と職種を提唱したい。つまり、名称の提唱だけではなく、職務範囲や求められるスキルを同定し、教育方法を確立する研究も今後必要になると言える。

## 2 リングストという言葉

元々の英語 linguist の辞書的な意味には (1) 言語学者と (2) 複数言語に精通した人、という2つがある[5]。翻訳業界では後者から派生した「複数言語の

専門家」というニュアンスで使われることが多い。たとえばイギリスの CIOL (The Chartered Institute of Linguists) では、翻訳、通訳、外国語教育などを専門にする人を認定している [6]。英語の linguist は包括的な職名としてすでに定着していると言える。

一方で日本国内でも、英語から作られたカタカナ語「リンギスト」の使用が外資系企業を中心に見られる。たとえば Lionbridge 社や SDL 社のような MLV では職種名として用いているし、Memsources や XTM のような翻訳管理システム (TMS) では、その UI (ユーザインターフェース) の役割名として設定されている。つまり「リンギスト」というカタカナ表記自体は全く目新しいわけではないため、日本国内において受け入れられる土壌はあるだろう。ただし一般英語としての linguist との間に、意味やニュアンスのギャップがある点には注意したい。

### 3 リンギストの射程

河野 [4] は、リンギストの仕事として「ポストエディット」や「機械翻訳エンジンの調整」、さらに「コーパスのデータクレンジング」、「プリエディット」、「翻訳工程の生産技術」も挙げている。いずれも機械翻訳と関係する作業だが、翻訳サービスのプロセス全体を眺めると、上記以外にも翻訳者の資質を必要とする仕事はいくつも考えられる。筆者らの翻訳産業における経験と、ISO 17100 [7] のプロセスを念頭に置きつつ、リンギストの職務に入りうる仕事を挙げたい。リンギストは LSP (翻訳会社内) にいる場合だけでなくソースクライアント (発注企業内) にいるケースも想定している。なお実際にリンギストが担当するかどうかは現場の判断や状況による。

#### 3.1 翻訳プロジェクトにおける仕事

ISO 17100 のプロセスに沿ってリンギストの仕事を列挙する。翻訳の作業の前後のタスク (pre-production, post-production) も射程としている。

##### 3.1.1 原文制作段階

翻訳の質を高めるには、原文ライティング時点からリンギストが関与することが望ましい。ISO 17100 では、付加価値サービスとして附属書 F に掲載されている一部項目に該当する工程である。下記のライティング (テクニカルライティング) やインターナショナルライゼーションも附属書 F に含まれて

いる。

**ライティング** 翻訳されることをあらかじめ考慮した原文を書く。原文の良し悪しで翻訳成果物の質が左右されるためである。プリエディット、制限言語などとも関係する。

**インターナショナルライゼーション** ローカリゼーション (翻訳) しやすいコンテンツを制作する。テキストを画像から分離しておく、など。

##### 3.1.2 翻訳前段階 (pre-production)

ISO 17100 ではセクション 4.6.3 (翻訳仕様書の作成) で扱う段階である。

**設計** 求める成果物の仕様を決定する。使う参考資料 (用語集、スタイルガイド、翻訳メモリーなど) の指定、検収時の評価方法や合否水準の指定など。

**参考資料の制作** 当該プロジェクトで使う用語集やスタイルガイドなどを実際に準備する。

##### 3.1.3 翻訳段階

ISO 17100 ではセクション 5 (production process) に包含される段階であるが、一部の項目 (プリエディットとポストエディット) は付加価値サービスとして附属書 F での扱いとなっている。

**機械翻訳システムの調整** 当該プロジェクト用のアダプテーション作業など。

**プリエディット** 機械翻訳システムが性能を発揮できるように原文の編集。

**翻訳** 翻訳の実作業。機械翻訳出力を利用した翻訳 (ポストエディット) も含まれる。

**チェック** 訳文の品質を保証する。LQA (Linguistic Quality Assurance) と呼ばれる。言語面の確認に加え、文化面も対象になることがある。チェック、校正、校閲などが含まれるが、ISO 17100 ではセルフチェック、バイリンガルチェック、モノリンガルチェック、プルーフリードは異なるステップとして定義されている。

**言語品質評価** 最終納品物の検収や中間納品物の確認で実施する品質評価。

##### 3.1.4 翻訳後段階

ISO 17100 に規定はないが、一部 (DTP やウェブのデザイン、字幕など) は付加価値サービスとして附属書 F に掲載されている。

**多言語デザイン** 訳文が組み込まれた製品の見た目を整える。DTP、アプリ、ウェブ、ビデオ字幕

など。

多言語ユーザー評価 訳文が組み込まれた最終製品の使いやすさなどを評価。

### 3.2 定常業務における仕事

特定の翻訳プロジェクトではなく、日常的に実施する定常業務の仕事もリングストの職務の射程に入る。ISO 17100 の付加価値サービスとして附属書 F に記載されている項目も含まれる（たとえば専門用語管理やアラインメント）。

言語品質評価 応募されたトライアル課題などを評価する。

用語集やスタイルガイドの維持管理 特定の分野や顧客で用いる用語集やスタイルガイドを整備する。

言語資産の維持管理 翻訳メモリーのアラインメントや対訳コーパスの整備する。

機械翻訳システムやツールのチューニング 機械翻訳システムや QA ツールの性能を引き出せるよう調整する。エラー定義ファイルの修正や、特定分野の機械翻訳システムのアダプテーションなどが含まれる。

機械翻訳システムやツールの評価や選定 言語成果物の質を高められるツールの評価や選定。機械翻訳システム、翻訳支援ツール、TMS、QA ツールなどが対象。

人材育成 翻訳者やチェッカーなどの人材を育成するために、資料やツールの使い方を教えたり、納品物にフィードバックしたりする。

繰り返しになるが、上記の範囲はあくまで暫定的な提示であり、今後の研究を通して調整や詳細化をすることになる。

## 4 必要になるスキル

リングストの職務に対し、どのようなスキルや能力が実際に必要になるかは、今後の研究が必要となる。たとえば EMT (European Master's in Translation) の枠組みなどとの比較検討も求められる。

リングストは専門職を想定している。ここで挙げた職務自体はリングスト固有のものではない。現状ではプロジェクト・マネージャーやセールス担当者が行っているものとの重複もあろう。しかし、理想は翻訳・言語的スキルを兼ね備えたリングストが担うべきであり、翻訳+ $\alpha$ のスキルが必要となろう。

## 5 おわりに

機械翻訳の利用が進む中で、「翻訳者」の仕事に限定されず、十分な言語・翻訳スキルを兼ね備えた言語専門職が確立することは今後の産業にとって望ましい。機械翻訳の訳出を後編集するポストエディター概念も包含しつつ、その範疇を超えた多言語関連タスクを担える「リングスト」という職名を提唱した。またその職務範囲や必要スキルの調査研究を進めることも提案した。今後、とりわけ機械翻訳の開発者と実務者が共同し、機械翻訳活用（アダプテーションなど）の評価や実施を行っていく機会も増えていくと想像される。リングストのような職種が活躍する場も増えるに違いない。

## 6 謝辞

本研究の一部は、日本学術振興会科研費補助金基盤研究 (S)「翻訳規範とコンピテンスの可操作化を通じた翻訳プロセス・モデルと統合環境の構築」(研究課題番号: 19H05660) の支援を受けて行われた。

## 参考文献

- [1] Automatic Language Processing Advisory Committee. *Language and Machines: Computers in Translation and Linguistics*. National Academy of Sciences, 1966.
- [2] 長尾真, 牧野武則 (編著). コンピュータで翻訳する. 共立出版, 1995.
- [3] 山田優. 誰がポストエディターになるのか? 翻訳研究への招待, Vol. 9, , 2013.
- [4] 河野弘毅. 機械翻訳の時代に活躍できる人材になるために. 通訳翻訳ジャーナル, Vol. SPRING, pp. 36-38, 2019.
- [5] Oxford University Press. *linguist: Oxford advanced learner's dictionary*, (2020-12-10 閲覧). <https://www.oxfordlearnersdictionaries.com/definition/english/linguist>.
- [6] Chartered Institute of Linguists. *Become a chartered linguist*, (2020-12-10 閲覧). <https://www.ciol.org.uk/chartership>.
- [7] ISO. *ISO 17100:2015 translation services — Requirements for translation services*, 2015. <https://www.iso.org/standard/59149.html>.